

文部科学省委託事業

令和6年度図書館地区別研修【九州・沖縄地区】

研修報告書



福岡県立図書館公式マスコットキャラクター「ふっきょん」

期日：令和7年1月29日（水）～31日（金）

会場：福岡県立図書館 別館2階 研修室

主催：文部科学省 福岡県教育委員会

主管：福岡県立図書館

【研修日程】

日時	研修内容	講師等
1月29日(水) 11:00-12:00	ボードゲーム体験・評価を通じた 参加者交流会（希望者のみ）	
13:30-13:50	開講式	
13:50-14:40	文部科学省説明（オンライン）	
14:50-16:50	【基調講演】 「DX時代の日本の（公共）図書館」	慶應義塾大学名誉教授 高山正也氏
17:00-17:30	【施設見学】（希望者のみ）	

1月30日(木) 10:00-12:00	【講義1】 「電子書籍・電子図書館と読書バリアフリー」	専修大学文学部教授 植村八潮氏
13:00-15:00	【演習1】 「AIとは？AIで何ができるか？」	かんたん AI 教育ラボ代表 中野良一氏 （元・科学技術館副館長）
15:10-17:00	【講義2】 「Be Strong Librarians」	元菊池市立図書館長 安永秀樹氏

1月31日(金) 10:00-12:00	【事例】 「宗像市の助成金申請」	宗像市民図書館
	「福岡県点字および録音図書連絡協議会」	福岡県立図書館
	「福岡の出版社と書店」	福岡県立図書館
13:00-16:00	【演習2】 「アイデアの出し方、まとめ方」	面白法人カヤック 管理本部長 丹治拓未氏 ちいき資本主義事業部ディレクター 長谷川裕子氏
16:00-16:30	閉講式	

本研修の効果を高めるため、運営において工夫した点は以下のとおりである。

- 各講義資料について、ダウンロードページを事前に参加者へ案内し、受講前に目を通すことを可能にした。
- 研修会場に WiFi を設置し、演習における利用のほか、講義内容に関する調べもの等で随時インターネットを活用できるようにした。
- 参加者に名刺の持参を呼びかけ、積極的な交流や情報交換を促した。

【実施結果】

(1) 参加者数 九州・沖縄地区の公立図書館等職員（※）計71名（部分受講者含む）

(2) 録画配信 日程：令和7年2月6日（木）～3月6日（木）

内容：文部科学省説明、基調講演、講義1、講義2

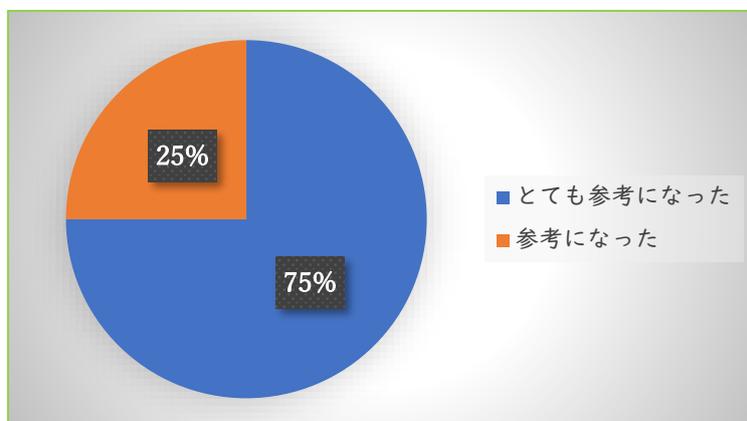
配信先：九州・沖縄地区の公立図書館等

(3) アンケート結果

[地区別研修全体を通して]

「とても参考になった」75% 「参考になった」25%

「あまり参考にならなかった」0% 「参考にならなかった」0%



[感想抜粋]

- ◇ 図書館という固定概念を払拭できるような研修だった。他館の取り組みや AI などの未来に向けての取り組みなどを知ることができてよかった。
- ◇ 全体的にテーマが一貫しており、今後の図書館の在り方を考える上で興味深く、参考になるものばかりだった。
- ◇ シフト等の都合で全日程には出られなかったが、配信があるので助かった。
- ◇ 講義だけではなく、実習として実際に体験しながら学べる科目もあり、実のある内容だった。
- ◇ 図書館研修ではあまりない項目もあり、大変勉強になった。

※参加対象は以下のとおりであった。

(1) 図書館法第2条に規定する図書館に勤務する司書で、勤務年数が概ね3年以上の者。若しくは研修テーマに関する業務に従事している者。

(2) 上記(1)と同等の職務を行うと福岡県教育委員会が認めた者。

【研修概要】

(1)ボードゲーム体験・評価を通じた 参加者交流会

司会者1名、スタッフ2名で運営し、計17名が参加した。

使用したゲームは、「ボブジテン3」「恋文」「ハゲタカのえじき」「NEU(ノイ)」「犯人は踊る」「かりうち」である。いずれも10～20分以内に終わるゲームで、各班2～3種を体験し、図書館として読書推進等でどのように使えるか、評価票を記入した。



[ボードゲーム体験の様子]

各班とも楽しく和やかな雰囲気、ゲームの体験と図書館職員としての交流ができたようである。

また、会場に[福岡県立図書館の所持するボードゲーム類、スタートガイド、ゲームによる本の紹介事例](#)を展示した。こちらも参加者の興味を引いていた。

(2)文部科学省説明（オンライン）

「図書館行政の動向」

文部科学省総合教育政策局地域学習推進課
社会教育人材研修係 係長 大澤幸展氏

1. 図書館の現状

近年、図書館数は微増傾向である。

指定管理者制度は、博物館で導入が最も進んでいるが、図書館でも右肩上がりで増えて

いる。自治体の考え方に合った形で進められることが望ましい。

職員数、司書数の推移を見ると、専任や兼任の司書数は抑えられ、指定管理者、非正規雇用者の数が増えている。

不読率については、長い目で見るとあまり変わっていない。スマートフォンの普及にかかわらず、本を読む層は一定なのではないかと考えられる。全国学校図書館協議会のWebサイトに最新結果があるので参考にされた。平成18年度以降、図書館費もあまり変わっていない。

2. 図書館行政の方向性

第11期中央教育審議会生涯学習分科会の議論において、つながりの希薄化や困難な立場にある人々に関する課題が注目された。個人尊重の時代のマイナス面とも言えるが、社会的包摂、地域コミュニティが一層重要になっている。人への投資、デジタル社会進展への対応が必要である。

このような状況に対し、図書館としては個人の学習支援、学びを通じた地域のつながりづくり、人づくり支援が求められる。図書館を拠点に人と人とのつながりを深め、地域コミュニティを安定させることや、国民全体のデジタルリテラシー向上も必要となる。

令和5年6月の教育振興基本計画には社会教育も含まれ、人材育成とウェルビーイングの2つのコンセプトが掲げられている。地域住民の意向を取り入れ、図書館の存在意義を明確にしていくこと、デジタル基盤を強化し、デジタル教育を充実することが必要だ。社会教育における学びを通じて、人々のつながりを作り出し、協力し合える関係づくりの土壌を耕しておくことが求められる。人づく

り、つながりづくり、地域づくりのハブとして社会教育人材は期待されている。

一方で、書店と図書館との連携が注目されており、骨太方針 2024 にも記載されたところだ。図書館と書店、互いにメリットがあるような形で連携されるのが望ましい。文部科学省では、連携事例集を作成して公開している。

3. 図書館関係制度、計画等

著作権法改正で、図書館関係の権利制限規定が見直された。民間事業者によるビジネスを阻害しないよう注意しつつ、国民の情報アクセスを充実させるものである。国会図書館による絶版等資料の個人に対するインターネット送信が可能となった。また、補償金を前提に一定の図書館での著作物の一部分のメール送信等も可能となった。こちらについては、補償金の指定管理団体である SARLIB が図書館の登録受付を開始した。図書館での運用における事務処理軽減スキームも準備している。

子供の読書活動については、第五次子どもの読書活動推進基本計画に基づき推進中である。不読率の低減、多様な子供たちの読書機会の確保、デジタル社会に対応した読書環境整備、子供の視点に立った読書活動の推進の4つが基本方針である。

読書バリアフリー推進計画については、公立図書館における読書バリアフリーの取り組み事例集を作成し、公開している。

4. 国における取組等

図書館費として地方財政措置をしているが、実際の使い方は各自治体に任せられる。図書館の重要性をどう捉えるかで、お金の使われ方が変わり得る。読書活動総合推進事業については、委託事業報告書を公開している

ので参考にされたい。電子書籍についても、令和4年度子供の読書活動の推進等に関する調査研究で、取組事例を公開している。

(3) 基調講演

「DX時代の日本の(公共)図書館：来し方を振り返り、行く末を探る」

慶應義塾大学名誉教授 高山正也氏

感染症の世界的大流行で世の中が変わる、というのは歴史で繰り返されている。コロナ禍後の現在も変化は生じている。科学的視点のみならず、社会的経験知を用いて、多角的に将来予測を行うことが重要だ。サミュエル・ハンチントンのいう世界八大文明の一つ、日本文明・日本文化を支える図書館について、来し方を見て課題を抽出し、利用できる手段を探して課題解決を提唱したい。



〔基調講演の様子〕

第1章「日本公共図書館の現状認識と課題」

日本語では「図書館」を「文庫」と言い、英語の Library と異なる意味を持たせる。図書館は「文を閲覧できる館」、すなわち建物であるが、Library は図書館サービスとそれを提供する組織を指す。組織であれば、ヒト・モノ・カネが問題となる。しかし、我が国の図書館学では一般に、図書館の構成要素は司書、蔵書、施設、設備、利用者として、カネの問題が抜けている。

司書は単なる労働者でなく、Professional/専門職と言われる。研究職でも行政職でもない。その専門性は蔵書の構成、利用者へのサービス提供等を核とする。

法制上、教育基本法、社会教育法の下に図書館法があるが、納本規定のある国立国会図書館法との関わりが明確でない。図書館では館同士のネットワークが重視されるが、その核となるはずの国立国会図書館との関わりが法的に明らかになっていない。

戦後、占領下の日本の図書館には、GHQのキーニープランが大きな影響を及ぼした。新憲法作成の準備調査のため来日したフィリップ・キーニーが、日本の図書館関係者を集めて日本の図書館のあり方を論じた。面積等が日本に近似のカリフォルニア州をモデルに日本の図書館網が考えられることとなった。しかし、キーニーは共産主義者として、GHQから放逐された。

占領軍により、日本の図書館水準向上運動が行われた。この運動とほぼ同時期に米国でも professional 教育の制度整備が行われた。米国において司書は大学院修士学位で養成されるものであり、それと同様の教育制度である Japan Library School が慶應義塾大学に設置された。しかし、日本の図書館界は大反対であった。伝統的に、日本の図書館員は単純労働者とみなされていたからである。ALA（アメリカ図書館協会）は専門職能団体だが、日本図書館協会は単純労働者の労働組合のようなイメージであろうか。

占領軍はCIE（民間情報局）図書館を設置し、日本人の人気を博した。開架式の図書館で、視聴覚資料も提供し、レファレンスサービスを定着させたのである。このような図書館が戦後の公共図書館のモデルともなった。

占領政策としては、図書館を日本の民主主義体制の基盤に据える一方、戦前日本の出版物の検閲・焚書・没収等により言論・出版の自由を剥奪していた。ここにはGHQの本音と建て前が露呈している。

一方で、図書館網、中央図書館構想等は実現しなかった。国立国会図書館一県立一市町村立という階層化に対する反感が、日本の図書館界にあったからである。



日本図書館協会から1963年に「中小レポート（中小都市における公共図書館の運営）」が出て、貸出サービスが重視され、公共図書館の無料貸本屋化が進んだ。「市民の図書館」の時代である。例えば日野市や浦安市等の大都市労働者のベッドタウンとして財政的に潤った自治体で図書館が充実し、利用者にも支持されたが、司書業務の単純労働化は自治体行政で、人件費圧縮の標的とされた。薬師院仁志等著の『公共図書館が消滅する日』（牧野出版 2020.5）を参考にされたい。

1979年12月には(株)図書館流通センターが発足し、図書館の整理業務の外部委託が本格化した。テクニカルサービスは外部機関に依存し、図書館はパブリックサービスに注力することになっていく。

21世紀に入り、さらなる図書館理念の大転換が起こる。図書館は「本をタダで読むところ」と考えられていたのが、「ライフスタイル確立の場」へと変化した。生活の場、快適な空間、街興し拠点として期待されている。

その象徴的存在が CCC 指定管理の武雄市図書館である。CCC は図書館運営を請け負うにあたって住民の要望を調べ、そのニーズを知り、新たな図書館の文化を創ることとなった。このような事例として、ほかに大和市立図書館等が挙げられる。

これからの図書館は、居心地が良く、自己の帰属するコミュニティへのアイデンティティを意識し、確立する場である。そのような図書館では、付加価値を作り出せるかが問われる。すなわち文化の創造が求められるのであり、AI などデジタル技術を応用し、司書にしかできないことをやらねばならない。単なる機械化・効率化でなく、新たなサービスの創出をすべきである。

なお、生成 AI を巡っては 2024 年 4 月、G7 広島サミットで「AI ガイドライン 10 原則」が取りまとめられ、日本は「人間と AI はチームである。日本的価値観をベースに標準づくりを目指したい」と主張した。

生成 AI としては Chat GPT が有名であるが、Perplexity というものもある。こちらには情報源明示機能があり、事実確認すなわちファクト・チェックに向くとと言える。

これからの図書館サービスは「歴史的調査研究」「教養・娯楽目的読書」「ファクト・チェック」「カレント・アウェアネス」の 4 類型が主になる。

メディアの衰退・権威失墜とフェイクニュース氾濫の現代においては、図書館のファクト・チェック機能が期待される。図書館では様々な情報が利用可能であるが、それらには虚偽やプロパガンダなども含まれ得る。利用者が情報を相互に見比べることで、どれが信用できるかを判断できるようにすべきである。



第 2 章 「抽出された課題と対応策」

今後の図書館の重視すべきサービスとして、参考業務と書誌調整（メタデータ作成）業務が挙げられるが、後者では AI 導入により大きな効果が期待される。

慶応 4 年(1868)以前の和書については、書誌調整の成果として『国書総目録』等があるが、その後の和書については不完全なものしかない。明治以降の和書の書誌調整を生成 AI 活用で行えないか。解題作成までできるはずである。

そのためには、和書群を AI に学習させる環境を作る必要がある。まずは、明治から現在に至る和書の目録を作らなければならない。納本制度による国立国会図書館の全国書誌は 1947 年以降のものである。戦前の納本先は帝国図書館でなく、内務省であったため、納本された書籍は散逸した。さらに現在は媒体も多様化しており、総合的なメタデータ化が難しい状況でもある。担当する機関として国立情報学研究所が考えられるが、ここは研究者の集まりであり、専門職としての仕事は期待しにくい。

この書誌調整には、既存の和書の書誌調整のための三大編纂物と言われる「群書類従」、「古事類苑」、「国書総目録」の編纂・発行にはそれぞれ極めて大雑把に見積もって、30 年間で 30 億円はかかると考えられる。これを行う決断はたいへん重く、相当に有能なリーダーでなければならない。この決断がなさ

れるよう、司書の皆様方にはぜひ声をあげていただきたい。

【補足】

講演時に省略せざるを得なかった結論・強調したかった事項等につき以下に付記しておきたい。

昭和の戦後期が始まって今年(2025年)で80年、この間、日本の図書館は幾多の紆余曲折も経験しながら、また、情報通信・デジタル化の最新情報技術革新の影響も受けながら、発展してきた。その結果、少なくとも、明治維新以降昭和戦前期に至る時期に比較すれば、国民の日常生活の中に図書館が一段と浸透したことは事実であり、これは昭和期までの図書館界先人たちの貢献によるものであろう。さらに、20世紀後半から現在にかけて、情報通信ネットワーク技術の発達と図書館界への導入・影響は一段と大きいものがある。今や情報のリアルタイム伝達、情報源へのリモートアクセスなどの情報流通の障害は極小化された。図書館の在り方も変化するのは必然である。そこで注目されているのがAI（人工知能）技術の図書館への導入である。

特に生成AIの実用化に伴い、図書館の参考業務と書誌調整活動へのAI技術の活用は図書館の本来的な在り方に大きく貢献できると考える。ただ、20世紀以降の本格的な和書の書誌調整を行うためには、上記講演概要で述べたように、多額の費用並びに、編纂に相応の時間と有能な指導者の存在・活用が不可欠である。またそれを、行政府の一学術研究機関等に依存することは危険である。図書館司書は人工知能を活用して、日本文化の知的精華の基盤をなす、書誌調整活動における

指導者の助言者、伴走者となることが期待されている。

(4)施設見学

2グループに分かれて、福岡県立図書館職員の案内により館内を見学した。別館子ども図書館や「りんごの棚」をはじめとするバリアフリー図書のコーナー、そして県内相互貸借資料の物流拠点である編成室が特に注目されていた。



[参考動画「福岡県立図書館を探検してみよう」]



[参考動画「福岡県立図書館のウラ側大公開!」]

(5)講義 I

「電子書籍・電子図書館と読書バリアフリー」

専修大学文学部教授 植村八潮氏

1. はじめに 出版と図書館

電子書籍の登場は、グーテンベルクの印刷技術登場と同様に出版、学び、読書のありようを変える。電子書籍は、紙の出版活動を支え、多様な読書（情報保障）を支えていく。

電子書籍が読書空間を広げ、新たな読者を誕生させている。

出版界は新しい方向へ向かっている。図書館は保存、記録などを意識することもあり、あまり変化していない。特に今の利用者、図書館へビュユーザーばかりを相手にしていると、本来の「知の拠点」という役割を失っていく恐れがある。

財政悪化と構造改革により、2001年にNPM（ニューパブリックマネジメント）が導入され、図書館経営論においてもコスト削減が重視された。また、市場原理導入により、数字の業績評価(KPI)が求められ、貸出や来館者数が重視されることとなった。これは「要求論」と重なるものである一方、レファレンスより貸出が優先され、数字にならない部分がおざりにされることでもある。出版不況と書店減少に伴う、図書館への出版界の反発は、市場原理導入の副作用と言える。ただし、ベストセラー複本貸出を別にすれば、図書館貸出による出版物売上への悪影響は全体としてはない。



[講義の様子]

図書館・学校図書館の運営の充実に関する有識者会議が昨年末から開催されている。デジタル社会への対応、読書バリアフリーへの対応、これからの子供の学びを支える読書環境の充実などがテーマである。

出版に関わる「知の循環」を誰が支えているのか。ここには自律的情報流通システムがあるが、本の購入については基本的に国家のお金が入っていない。読者のお金だけで出版が支えられるようにしてきた。ここには、文化に国家が介入することは避けるべきという考えがある。図書館は知る自由の保障を支えることで、知の循環に関わってきた。

2. 出版のDXと電子書籍市場

経済産業省「DXレポート2中間まとめ」（2020）の定義では、DXには①デジタルイゼーション②デジタルライゼーション③デジタルトランスフォーメーションの3段階がある。紙文書の電子化は①にあたる。②は電子書店、紙と電子の同時制作などであり、③にあたるのは全体の製造プロセスのデジタル化、ビジネスモデルの変革である。

出版市場の現状を見よう。2024年、紙と電子で1兆5716億円、1.5%減少した一方で、電子コミックが市場の1/3を占める。雑誌冊数はピークの17%である。かつては雑誌の売上で本の出版を支えていた。雑誌で支えることが難しくなった今後は、本の価格が上がるであろう。

日本におけるコミック市場は2023年に過去最高の売上を記録した。電子コミックの寄与が大きい。これを牽引したのがDXであり、ビジネスモデルの革新である。

出版大手はもはやデジタルコンテンツ企業である。デジタルの収入によって、紙の出版を支えている。小説投稿サイトを経て、紙で出版された本は約18,000タイトル以上になる。文字情報流通の主役が紙からデジタルメディアに移り、大きく広がっている。

3. 電子図書館の現状

図書館向け電子書籍サービスのほか、デジタルアーカイブやデータベースなども広義の電子図書館と言える。一方で、図書館は電子書籍を所蔵できない。電子書籍サービスは貸出でなく、公衆送信による閲覧である。

「電子図書館・電子書籍サービス調査2024」を見よう。コロナ禍を契機に導入が急増し、以後伸びは鈍化した但未導入自治体でも導入意向は強い。今後は広域連携による導入が増えるのではないかと。

電子図書館の利用者メリットについて、まず有効と考えられたのは読書バリアフリー、障害者差別解消のための合理的配慮となることである。さらに非来館貸出サービス、多言語電子書籍も挙げられる。

図書館側のメリットとしては、アクセシビリティ対応に加え、コスト削減、資料の回転率向上が挙げられる。コスト削減にあたるのは、貸出・予約業務の自動化、督促や汚破損の回避である。

導入館におけるコンテンツについては、ネガティブな意見が減少傾向にあり、読書バリアフリーや学校連携の進展で新たな課題が意識されている。実際に提供されているコンテンツを見ると、TRCと丸善雄松堂で約25万タイトルと、決して少なくない量が提供されている。貸出率は紙より電子の方が高い。

電子図書館の利用促進については、図書館以外の施設やイベントでの広報が効果的である。館内周知では効果が薄い。自治体Webサイト等への掲載も有効である。

資料収集方針では、紙と電子の使い分けが必要である。電子では読み上げなどバリアフリー機能付きを積極収集するほか、学習参考書や問題集の収集を可とする事例もある。

紙の書籍と電子書籍の長所と短所は、誰の観点で評価するかによって異なる。



4. 学校図書館での利活用

2016年の「学校図書館における電子書籍の利用モデルの構築」による調査の時点で、小学生は紙の本と電子書籍を区別せず読んでいる。小説投稿サイト「小説家になろう」利用者である高校生の約2割は、紙の本を月に1冊も読んでいない。この層が不読者とみなされるのは問題であった。第四次子どもの読書活動の推進に関する基本的な計画

(2018)から、電子書籍等の利用も読書とみなすことになった。

2022年8月には、文部科学省がGIGAスクールと公共図書館電子書籍サービスの連携についての事務連絡を出した。学校への公共図書館電子書籍サービスの導入が進んでいる。立川市等において、児童生徒へのIDパスワード配布により、利用が大きく伸びた。回転率で考えると、費用対効果が紙に比べて電子書籍はかなり高い。

5. 電子図書館のアクセシビリティ

読書バリアフリーの推進として、EPUBリフロー（TTS対応可）化が必要である。著作者団体、出版団体の声明により、この3月までに対応される。同じく、本の総合カタログBooksでは、3月のリニューアルでアクセシブルブックを探しやすくなる。

国立国会図書館では「電子図書館のアクセシビリティ対応ガイドライン 1.0」を公開している。電子図書館は近い将来、「ユニバーサルな読書の場」になり得る。ただし、視覚障害者の ICT スキルが低ければ、電子書籍の読書がかなわない。

(6) 演習 I

「AI とは？ AI で何ができるか？」

かんたん AI 教育ラボ代表 中野良一氏

I AI とは何か

ダートマス会議（1956）で「機会が人間のように考えられるか？」が議論され、AI 研究がスタートした。その後、2度の AI ブームを経て、現在は ChatGPT の発表をきっかけとする第4次 AI ブームの最中にある。

人工知能（AI）の概念には、機械学習（マシンラーニング）が含まれ、その下位概念として深層学習（ディープラーニング）が位置付けられる。

機械学習とは大量のデータを用いて、モデルに学習させ、問題を解かせるものである。

深層学習とは、人間の脳の神経回路の仕組みを模したニューラルネットワークを多層に重ねることで、学習能力を高めた機械学習の手法の一つである。

深層学習で可能になることとして、画像分類、物体検出、顔認識、画像生成、画像キャプション生成、画像スタイル変換、画像セグメンテーション、姿勢推定などが挙げられる。画像スタイル変換では、例えば肖像写真をゴッホの自画像風に変換することができる。画像セグメンテーションでは、画像においてピクセル単位で物体を特定することがで

きる。姿勢推定は、画像から人物の関節を検知するもので、職人の動きの分析や不審人物の動きの検出（万引きなど）などにも使われる。

【演習】

本研修では、参加者各自が電子端末を持参し、演習に臨むこととしていた。ここでは、「単語分割アプリ」「Word2Vec」「Self-Attention Mechanizm Visualization」の3種の Web アプリで、参加者各自が AI 自然言語処理の体験を行った。

2 リアルタイム物体検出

【演習】

Web カメラを使って、YOLO による物体検出を実演し、参加者数名も操作体験をした。カメラに映った物体の名前が、モニターに表示される。自動車の自動運転や、工場での不良品検出などにも使われる技術である。



[演習 I の様子]

3. ChatGPT を使ってみよう

ChatGPT とは「Chat Generative Pre-trained Transformer」、OpenAI が 2022 年 11 月に公開した Chat-bot サービスである。図書館では、利用者支援や情報発信、資料デジタル化とメタデータ生成などでの活用が考えられる。ただし、ChatGPT ひとつに頼ることはしない方がよい。Claude などの

別のサービスも併用して、より信頼できる回答を選ぶとよい。

【演習】

参加者各自がChatGPTを使い、架空の問合せについてレファレンス調査を行ってみた。調査のための手順をChatGPTに作成させ、それに沿ってさらにプロンプトを入力してChatGPTに回答させた。

さらに、SNS投稿文やクレームへの回答文についてもChatGPTによる作成体験を各自で行ったほか、図書館での新たなサービス導入のためのディベートをChatGPTに行わせ、論点整理をする体験もできた。より効率的な回答出力のため、「深津式プロンプト」や「シュンスケ式ゴールシークプロンプト」が紹介された。



(7) 講義 2

「Be Strong Librarians 図書館が地域のためにできること 菊池市立図書館の実践」

元菊池市立図書館長 安永秀樹氏

菊池市中央図書館（生涯学習センター）は2017年（平成29年）にオープンした。愛称の「KiCROSS」は中高生も含む選定委員会で決定したものである。建設にあたってはスタッフの思いを取り入れつつ、市民の意見を聞いた。「菊池市の図書館を考える市民の会」から多くの意見を受け、議論もしたが、同会

は「図書館友の会」となり、今では図書館最大の協力者となっている。

建設のコンセプトは「市民とともに学び育つ～人づくりまちづくり図書館」である。図書館として、市民の役に立つことが極めて大切だ。市民が困っていることについて、意見を言ってくれる人、組織とつながりを作っていく必要がある。

予算がない、前例がない、他でやってない、という思考ではダメだ。他館の情報を取るのはいいが、何をすべきかは自分のところで考えなければならない。

菊池市中央図書館の最大の目標は60年後の評価だ。常にバージョンアップし、市民にとって世界一と思ってもらえて、解体・改修の時に「あってよかった」と感謝されるような図書館を目指す。

また、中央図書館は「何を学んでいるか」が評価される社会を目指す。それは学歴でなく、学習歴が、学び続けることが活かされる社会だ。

ジュリアーニ元ニューヨーク市長によれば、図書館が市民や社会にもたらすものは投資をはるかに上回る。「無料の貸本屋」を超えて「役に立つ」ためには、司書に期待される役割が大きい。

公共図書館司書には、禁止事項を増やしたがる、リスクを避ける、コミュニケーション能力に欠けるなどの傾向が感じられる。図書館の禁止事項については貼り紙より、あえて口頭で伝える方がコミュニケーションが取れてよいという考えもある。伝え方のスキルを上げることも大切だ。

資格と資質は違う。資格は公式に認められたものだが、それで仕事ができることにはならない。資質、何をやりたいかが大切であ

る。司書の採用面接でも、何をやるか、やりたいか、できるかといったことを問い、資質を見極めるとよい。図書館の人格は職員で決まる。

一方、会計年度職員については、作業員としての募集となりがちだ。数合わせでは図書館組織の充実にはつながらないと思う。会計年度任用職員であっても、専門職として評価されれば給与を増やすことはできるだろう。

多様なメンバーがいて、共通の文化を発展させていくため支え合う組織、聞く耳を持つ、意見を言い合える組織づくりを図書館でも行ってほしい。



[講義2の様子]

「こうありたい」図書館の理想像を言語化してみよう。ユーモアを入れて作るとさらによい。

社会のために役に立つ図書館、職員であるとしてよい。課題解決の前に、課題に気づく力がまず必要だ。

どんな図書館でも人は飽きる。職員がオペレーター化すると凋落する。同じことを繰り返すだけなら、AIでよいことになる。

図書館の行政における優先度が低いのであれば、理解者を得る必要がある。役所や市民に対してアピールする工夫をしよう。「がんばってる感」を出すことも大事だ。

何でも気づいたらやってみることだ。財政知識を身につけ、予算要求できるようにしよう。条例や規則も時代に合わせて変えていけばよい。毎年のように、新しいことを打ち出そう。本棚ばかり見ていると、何も生まれない。菊池市中央図書館では、地元企業応援として、新酒のPR～販売イベントを行ったこともあった。地元商店等を応援することは市民を応援することと同じだ。図書館を市民の課題解決の窓口にしてもらうとよい。

教養の役割とは、幅広く新しい視点を示すことだ。専門知識だけでなく教養を持ち、新しい視点で仕事を考えよう。課題を正しく認識しなければ、解決もできない。

地域づくりにあたっては、思い込みを捨てて、市民の思いを拾ってほしい。地域とのつながり、キーマンを知ることも必要だ。図書館員は地域団体の寄り合いや会議に参加しているだろうか。

皆さんには破天荒になってほしい。破天荒とは「今まで人がなし得なかったことを初めて行うこと」だ。自分たちで考え、話し合い、望んだことを実行してほしい。菊池市立図書館では、何か新しいことをしようとする際に、前祝いとして成功した時のことを考えて話し合い、実行に移した。失敗したらどうしようと話すばかりでは、面白さは生まれない。

一方で、要員と人員の計画も重要である。要員計画で必要な人員やスキルを明確にしなければ、やりたい事業はできない。単なる人員としては1だが、能力として1以上にしてくれる人がいる組織を目指そう。図書館の事業は必要であり、そのために欠かせない人員と認められると、簡単には削減されない。

菊池市立図書館ではいろんなことに取り組んだが、「失敗してもいい」という前提だった。何か得られるか、探ればよいのだ。

菊池市では市立図書館で学校司書を採用して派遣している。また、学校連携を進め、市立図書館の本も学校で受け取って借りることができる。発達段階に応じた読書推進イベントも行っている。きくちの泉子ども文庫基金条例を制定して寄付金を集め、児童書の購入や作家を呼んだイベントに使っている。

デジタルアーカイブの運営では、図書館振興財団の補助金とデジタル田園都市国家構想交付金を活用し、自己負担なしでシステム更新を行えた。モノクロ写真をカラーにして見せる取組もある。

多文化共生事業にあたっては、技能実習生へのアンケートの結果から外国人のニーズを探った。そこで「やさしいにほんご」の活用、多言語支援活動、多文化共生イベント、学習支援「にほんご教室」などを行った。「にほんご教室」はリモートで、海外でも受講例がある。こうした取組でくまもとSDGsアワード未来づくり部門優秀賞を得た。

自分の考えをさらす場所を作ってほしい。菊池市立図書館では、採用後に全職員の前でプレゼンを行う研修を行っている。自分の考えを伝える勇気と、人のプレゼンから気づきを得られる。

図書館は「成長する有機体」と言われるが、そうなるためには他機関や組織を巻き込みつつ、職員が成長する必要がある。図書館職員の声は弱く、小さい。しかし伝えられるものはあるはず、それを外に出していただきたい。

(8)事例発表

①「宗像市の助成金申請」

宗像市教育部図書館

宗像市には「読書のまちづくり推進計画」があり、その基本理念は「読書でかがやく未来を築くまち」である。平成29年度以降、公益財団法人図書館振興財団（以下、図書館振興財団）の助成金を4回得ている。



〔事例発表①の様子〕

宗像市では、平成18年度に「調べる学習コンクール」を開始したが、平成26年度以降、参加者が急増し、資料や予算が足りなくなってきた。

そこで平成29年度、「調べる学習」推進事業について、図書館振興財団の振興助成事業へ応募申請した。助成区分は「調べる学習」推進活動に対する助成である。市民図書館と学校図書館の資料充実とインターネット環境の整備に取り組むことを目的として、調べ学習用資料、書架、パソコンの購入で850万円の助成をいただいた。これにより各学校図書館にインターネット検索性パソコンを1台、市民図書館でも10台を設置できた。また、学校図書館、市民図書館とも調べ学習用資料が充実した。

平成31年度には、市民の誰もが、いつでもどこでも読書できる環境を整備すべく、「読書のまちづくり」を推進する電子図書館整備事

業」で助成の申請をした。助成区分は「公共図書館のICT化推進に対する助成」である。電子図書館初期導入費、コンテンツ購入費で426万円の助成をいただいた。宗像市電子図書館を青空文庫含む電子書籍6,400点で整備できた。読書バリアフリーにも有効であったほか、コロナ禍においても市民に読書環境を提供できた。

市民図書館と学校図書館はすでに資料の相互貸借ができていたが、システムが別であったため、操作等が煩雑で非効率であった。そこで、令和3年度に「もっと！読書のまちづくりを推進する図書館システム一元化事業」として、助成を申請した。助成区分は「図書館運営に対する助成」である。図書館システム初期導入で1,000万円の助成をいただき、システム一元化が実現した。市民図書館司書、学校司書とも作業負担を軽減できた。

「調べる学習コンクール」の参加は増え続ける一方、小規模校や離島の学校では調べ学習資料が不足していた。そこで令和4年度に「もっと！調べ学習で育てたい！6つのちから」事業として助成の申請を行った。助成区分は「調べる学習、読書活動を推進する学校図書館への助成」である。100万円の助成を得て、小規模校等へ調べ学習用資料159冊を購入することができた。また、学校司書研修会で百科事典の使い方を説明、実習することもできた。

助成金申請については、いずれも「読書のまちづくり推進計画」の方針に沿った取組であり、前年度に市の財政課に申請内容等を共有していた。

②「福岡県点字および録音図書連絡協議会」

福岡県立図書館総合サービス室

1. 福岡県点字および録音図書連絡協議会

福岡県点字および録音図書連絡協議会（以下、点録協）の会員は、県内の公共図書館7館、点字図書館3館、県立特別支援学校4校、国立福岡視力障害センターである。

会員となるのは、点字や録音図書のほか、視覚に障がいのある人等が利用しやすい書籍・電子書籍の提供を行う施設及び学校であり、年会費は各施設5,000円としている。

6月頃の総会で各会員施設の近況報告、課題共有を行い、11月頃の担当者連絡会にて会員施設の見学や事例発表等を行う。また、2月頃には点録協会員施設職員のほか、公共図書館職員、ボランティア、福祉協議会等を対象に研修会を開催している。



〔事例発表②の様子〕

2. バリアフリー図書読書体験会

福岡県立図書館では、点録協会員施設等において、バリアフリー図書読書体験会を開催している。

これは福岡県読書バリアフリー推進計画に則ったものであり、「活字による読書に困難を抱える当事者やその家族等に読書の可能性と楽しさを感じてもらうこと」「一般の方に読書バリアフリーサービスを知ってもらうこと」

「行政や図書館関係者にも見学してもらい、読書バリアフリーの取組推進の機会とするこ

と」等を目的とする。令和6年度は4回実施した。

内容は布の絵本、点字付き絵本、大活字本などのバリアフリー図書展示のほか、音声デージー図書等の体験、個別の利用相談、リーディングトラッカー作成体験、音声読み上げ機等の補助用具体験などである。

課題としては、当事者への広報と新たな開催場所の開拓が挙げられる。

3. 福岡県立図書館のバリアフリーサービス

録音図書（デージー）やマルチメディアデージーの貸出を行うほか、館内でプレクストークやタブレットによる体験もできる。大活字本、LLブック、点字図書、外国語資料の貸出や布の絵本の団体貸出を行っている。電子図書館ではオーディオブックや読み上げ機能付き電子書籍の利用が可能である。

館内には、拡大読書器やインターネット読み上げパソコン、車椅子等があり、利用に供されている。

詳しくは福岡県立図書館ホームページの[「バリアフリーサービス」のページ](#)を参照されたい。

③「福岡の出版社と書店」

福岡県立図書館ふくおか資料室

1. はじめに（県内の書店の状況）

いわゆる無書店自治体が増えており、全国で約28%、福岡県内では約32%にのぼっている。また、福岡県書店商業組合員数は、平成28年の248軒に比べ、令和6年は193軒と大きく減少した。

2. 書店振興をめぐる国の動き

文部科学省では、令和6年4月に「書店・図書館等の連携による読書活動の推進について～書店・図書館等関係者における対話のまとめ～」を公表し、同6月には「図書館・書店等連携実践事例集」を公開している。また、令和7年度予算案では「書店を含む読書の街づくりのための協議会」を設置する予算が計上され、令和8年の「図書館の設置及び運営上の望ましい基準」見直しにおいては、地域の書店と共存する仕組みを検討することが方向性として示されている。

経済産業省では、令和6年3月に「書店振興プロジェクトチーム」が立ち上げられ、同10月「関係者から指摘された書店活性化のための課題（案）」等の資料が公表された。



〔事例発表③の様子〕

3. 福岡県立図書館の出版社・書店連携事業

令和2年度には、福岡の出版社に関する企画展示を行った。この中で、出版社から古書店、新刊書店まで巻き込む福岡の恒例イベント「ブックオカ」のコーナーも設けた。

令和3年度には、「今、独立系書店がアツい！～地域に本屋を～」をテーマに、書店経営に携わる3名の座談会をWeb配信した。出店時の苦労や経営の工夫、喜び等を語っていただいた。

令和4年度には、県内の出版史をテーマに講演会「明治・戦後の福岡の出版」を開催し

た。当日は参加者が戦前の出版物に触れる機会も設けられた。

また、令和2年度末に作成したウェブサイト「福岡の出版社」は、翌年度には「福岡の出版社と書店」としてリニューアルし、その後も掲載書店を増やしている。令和6年度は、県内の公共図書館から紹介いただいた書店も少しずつ追加しており、現在は17の出版社、34の書店を掲載している。

さらに、実際に書店を訪問取材して、SNSで紹介する「#ふっきよんの本屋めぐり」を実施中である。このSNS投稿では「図書館で本屋さんを紹介しよう」というハッシュタグを付している。これを活用いただき、九州全体で図書館から書店の紹介ができればありがたい。

4. 飯塚市立図書館の書店連携事業

福岡県内の事例として、飯塚市立図書館の取組を紹介したい。同館で例年秋頃に開催しているイベントが「ぶっくりモールin飯塚」である。図書館と商店街及び書店が近いという立地を利用し、それぞれでのイベントを統合的に実施している。スタンプラリーを行うことで回遊性も高まっており、地域と活字文化を共に振興できているようだ。

5. 福岡県の書店の紹介

最後に、福岡県の書店をいくつか紹介する。（※詳細は「[福岡の出版社と書店](#)」のページ、[X「#ふっきよんの本屋めぐり](#)」または[Instagram「#ふっきよんの本屋めぐり](#)」を参照）

(9)演習2

「アイデアの出し方、まとめ方」

面白法人カヤック

管理本部長 丹治拓未氏

ちいき資本主義事業部ディレクター 長谷川裕子氏

1. ブレインストーミングについて

ブレインストーミング（以下、ブレスト）は、みんなで楽しく話しているうちにアイデアが出てくる手法である。アイデアを出して、まとめるというのが本演習の趣旨だが、アイデアがたくさん出てくる、その楽しさを知ってもらうことも目的の一つだ。

ブレストでは、他人のアイデアを否定しないことはもちろん、面白いアイデアを出そうとするのではなく、とにかく量を出すことが大切だ。面白がり体質、ポジティブ思考になっていこう。

量を出すためには、ハードルを下げる必要がある。そのためには肯定のリアクションが大きいことが効果的だ。普通のアイデアでも、よいリアクションをしよう。



[演習2（説明）の様子]

2. ブレスト「昨日見た夢」ほか

【班別演習】

全6班に分かれた演習である。最初に、3分で自己紹介と併せてチェックイン（※）を行った。（※会議等でのアイスブレイクの一つ。ここでは、心配事を開示し合った。）

続いて、各班に配付されていたブレストカードセットを用いるなどして、「昨日見た夢」「図書館の入り口にあったらよさそうなもの」「子供や若者が自然と集まる図書館にするためのアイデア」といったテーマでブレストを行った。思いついたことを短く話し、周りは良いリアクションを返すということを各班で繰り返した。スピードを上げてリアクションで盛り上げ、制限時間内にできるだけ多くのアイデアを出し、雰囲気をはぐした。



[演習2 (ブレスト)の様子]

3. ブレスト「2030年の図書館」

【班別演習】

以下の5つをヒントに2030年の図書館について、今までより多くの人々が利用したくなる仕組みや、仕掛けに関するアイデアを各班で出し合った。

- ①考える視点をずらす
- ②5年後はどんな社会か
- ③正確な知識より乱暴なアイデア
- ④これまでの研修内容を応用
- ⑤さっきのブレストに立ち返る

出たアイデアをノートパソコン等でメモしつつ、同じテーマで8分、10分、9分、5分と休憩をはさみつつ計4回ブレストを行った。

4. 班別まとめ

【班別演習】

各班、メンバーの中から1名代表を選び、その図書館の5年後(2030年)を班の発表テーマとする。

代表選定後に班内でのヒアリングとして、代表者が図書館の特徴や課題を説明し、ほかのメンバーが質問を行った。

以下の3つに気をつけながら、ブレストで出たアイデアを1つの方向性にまとめていった。

- ①やりたいことを意識する
- ②制約は気にせず5年先の時間軸を意識する
- ③ステークホルダーがいるなら前提として出しておく

各班、ノートパソコン等を使用し、発表用パワーポイント様式をまとめた。

5. 班別発表

【演習】

各班の発表パワーポイントの概要は以下のとおりである。

1班

【選択・実行したいアイデア】

非来館型サービスの充実

- ・VR 図書館 (閲覧スペースを書架に)
- ・電子図書館、デジタルアーカイブ
- ・ドローンで本を届ける
- ・AI 窓口

【選択したアイデアで期待できる効果】

- ・市町村支援につながる!
- ・資料の保存もできる!
- ・読書バリアフリーにつながる!
- ・時間や場所の制約ないので会社員や学生も利用しやすい!
- ・ドローンは環境にも優しい!

2班

[選択・実行したいアイデア]

- 行政・学校とのつながり（学校へ出向く・アウトリーチ、他部署との連携企画）
- 移動図書館、リモートのレファレンスサービス、郵送サービス、バリアフリー
- 住民の方との連携（名産品、観光名所、郷土資料）

[選択したアイデアで期待できる効果]

- 図書館への理解を深めてもらう。協力し合う。
- 図書館の価値観を高める。
- 図書館に行けない方にも図書館サービスを届ける。
- 地域を元気にする。地域振興。地域経済の活性化。



3班

[選択・実行したいアイデア]

大きいテーマとして“癒し”（図書館で働く人も利用する人も）

- ① “ハンモック”を置く リラックス=ふとんを連想。利用者への提供。大きさも妥当。
- ②中庭の活用
- ★ヤギのいる図書館。ヤギに会いに来る。ふれあい動物園など。ヤギを借りていた経歴（雑草駆除）がある。
- ★リングの木植樹。収穫祭などイベント企画。世話ボランティアを募る。ツリーハウス構想。

★お膝でお話会。館内でいつでも（未就学児～こどもを想定）天気が良いときは中庭、中央公園など。絵本を読んでとたのまれたら司書が対応する。

貸出よりも来館を促す（ぼっかり空く利用が少ない層へのアプローチ）

①YA向けサービス 館内設備にアクティブ面（ボルダリング）設置するなど発散する場を。学習室で学習支援、運動（発散）したあとのリラックス（ハンモック）など。

②子育て世代向けサービス 慌ただしく子供の本だけを借りていくママさん多い。自分の本をゆっくり選べる環境を提供。保育士連携し、一時預かりする場所をつくる

[選択したアイデアで期待できる効果]

○本以外に図書館に来る動機付けをつくる。最初は本に興味なくても、周りに本があると興味が生まれ、図書館の魅力伝わるのでは。利用者増につなげたい。

○日常で足が向く図書館へ。アーケード街からそのまま図書館へ来館をうながす。高齢者は比較的使用が多いが、YA～子育て世代の利用が少ない世代へ既存の図書館とは違った魅力をPRできる。一時預かりなどで現在は滞在時間が少ない利用者もゆったり過ごせるのでは。

4班

[選択・実行したいアイデア]

- ・子ども一時預かり(1～2時間程度)
 - 曜日○時等、 ⇒託児所と連携
- ・お話し会等のイベント
- ・地域の学校等と連携
- ・子ども優先デー(大人優先デー)
- ・出張図書館
- ・成長アルバム、家族写真

【選択したアイデアで期待できる効果】

○子どものころ利用した人が、(一時的に離れていたとしても)また大人になって利用できるように種まきをする

○⇒その元・子ども達が次の世代へ図書館の魅力を繋げる

5班

【選択・実行したいアイデア】

①移動図書館兼キッチンカーを運行

・地元のお祭りにブースを出す

・遠隔地、離島へ

・メニュー候補：チキン南蛮、地鶏

②司書ユーチューバー

・中高生も一緒に企画・出演してもらう

③健康相談・体づくり(ジム併設)

・保健師・トレーナーが常駐

【選択したアイデアで期待できる効果】

①地域差の解消、図書館をPRすることで来館者増加につながると思われる。売上は新たなサービスの財源確保。

②③中高生や高齢者に向けたサービスを展開することで非来館者の開拓につなげたい。

6班

【選択・実行したいアイデア】

①建替え(よい場所に)

②子ども食堂(給食センター併設)

③郷土資料室+郷土お土産コーナー

④プロジェクションマッピング(書影、コメント、県内の図書館、福岡魅力PR)

⑤おしゃべり、BGMフロア

⑥貸出自販機事業を県内に展開

⑦バーチャル「図書館マスコットキャラクター」を育てよう>県内の公共図書館、学校図書館>バトル

⑧有名人(アイドル)一日館長

⑨ドリンクバー、お菓子バー

【選択したアイデアで期待できる効果】

○若者やこどもに来てもらえる

○遠方からも観光客も

○話題になる、知名度上がる

○ネットワークの強化

○SDGs

○おしゃべり自由で敷居を下げる(市町村も同様に取組やすい)

6. 終わりに

ブレスト最大の効果はみんなが何でも言えるようになることだ。リアクション側の訓練が必須である。ブレスト体質になると相談、雑談しやすい人になれる。楽しくアイデアを出し合うと、そのテーマについて自分事化も進むものだ。



編集・発行 令和7年3月5日

福岡県立図書館

〒812-8651 福岡市東区箱崎1-41-12

TEL092-641-1123 FAX092-641-1127

ホームページ

<https://www2.lib.pref.fukuoka.jp>